

西安寺跡第9次
発掘調査報告書

2021. 3

王寺町

西安寺跡第9次
発掘調査報告書

序

西安寺跡は、飛鳥時代に創建された古代寺院の遺跡で、王寺町を代表する重要な遺跡です。

2014年度から継続的に発掘調査を行い、塔、金堂の遺構がとても良い状態で保存されていることが確認されたことで、2019年2月には、奈良県指定史跡に指定されました。

この西安寺跡の発掘調査は、2019年7月に全国で初めて文化庁長官から認定された「王寺町文化財保存活用地域計画」においても、文化財を掘り起こす事業として位置づけ、実施しております。将来、発掘調査の成果を西安寺跡の史跡整備という形で、皆様にご覧いただけるよう尽力してまいります。

最後になりましたが、調査の実施にご協力くださいました土地所有者様はじめ、文化庁、奈良県文化財保存課など、関係各所の皆様に御礼申上げます。

2021年3月

王寺町長

平井 康之

例　　言

- 本書は、2019年度に国庫補助事業として実施した西安寺跡第9次発掘調査について報告したものである。
- 西安寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会、2010年改訂版）10B・0001として登載されている。
- 調査は王寺町が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町長	平井康之
地域整備部参事		前田日出高
地域交流課　文化資源活用係長	岡島永昌	
		同主任　梅野麻衣子（2020.11.～）
		同主事　清川正治（2020.11.～）
		同主事　寺農織苑
調査担当者		同臨時職員　櫻井恵（2020.4～会計年度任用職員）
		福井彩乃（2020.4～会計年度任用職員）
遺物整理		青木佐和（2020.4～会計年度任用職員）
発掘作業	株式会社アイディエイ	
空撮・写真測量	株式会社アクセス	
調査協力・助言	宗教法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県地域振興部文化財保存課（文化・教育・暮らし創造部文化財保存課）、奈良県立橿原考古学研究所、石田由紀子、市本芳三、井上さやか、岩永玲、上原眞人、浦蓉子、江浦洋、大西貴夫、大橋泰夫、岡田雅彦、奥田尚、甲斐弓子、亀井聰、北山峰生、郭家龍、齊藤慶史、齊藤希、清水昭博、鈴木嘉吉、鈴木裕明、清野陽一、関川尚功、高橋香、田邊征夫、中川二美、西垣道、丹羽崇史、箱崎和久、原田憲二郎、馬場基、平田政彦、廣岡孝信、苗凌毅、福嶋啓人、福田さよ子、藤間温子、吉村公男、渡辺晃宏、（五十音順、敬称略）西安寺跡史跡整備活用委員会（2017.2.17設置）	
	菅谷文則（～2019.6）、大脇潔、山岸常人、東野治之、仲隆裕、前園実知雄（2019.12～）坂靖（～2019.3）、光石鳴巳（2020.4～）中川忠儀（敬称略）	
3.	本書で使用している座標数値は世界測地系、水準値はT.P. 値（東京湾平均海面値）に基づくものである。	
4.	土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に拠った。	
5.	図2・15は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）、図3は国土地理院発行の1/50000地形図大阪東南部（昭和59年7月30日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010年改訂版）をもとに作成した。	
6.	石材の同定は奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員奥田尚氏、樹種の同定は奈良県立橿原考古学研究所共同研究員福田さよ子氏による。	
7.	出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町において保管している。	
8.	遺物の撮影は岡島永昌、本書の執筆編集は櫻井恵が行った。	

本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 調査の内容	4
第3章 まとめ	16

挿図目次

図1 王寺町の位置	図9 2トレンチ検出遺構平面図・ 北壁土層断面図 (1/100)
第1章 はじめに	
図2 調査位置図 (1/1500)	図10 2トレンチ出土遺物実測図 (1/4)
第2章 調査の内容	図11 1トレンチ検出遺構平面図・ 東壁土層断面図 (1/100)
図3 周辺の遺跡 (1/50000)	
図4 3トレンチ検出遺構平面図・基壇外装立面図・ 東壁土層断面図 (1/50)	図12 柱根検出遺構平面図・土層断面図 (1/25)
図5 3トレンチIV層出土遺物実測図 1 (1/4)	図13 1トレンチ出土遺物実測図 (1/4)
図6 3トレンチIV層出土遺物実測図 2 (1/4)	第3章 まとめ
図7 3トレンチIV層出土遺物実測図 3 (1/6)	図14 金堂検出遺構平面図・ 南面乱石積基壇外装立面図・復元図 (1/200)
図8 3トレンチ I～III層出土遺物実測図 (1/4)	図15 伽藍想定図 (1/500)

写真目次

写真図版 1	写真図版 6 2トレンチ 東回廊・回廊内側雨落溝検出状況 (南東から)
調査地全景 (上空から)	東回廊・回廊外側雨落溝検出状況 (南西から)
写真図版 2 3トレンチ	写真図版 7 1トレンチ 調査前 (北から)
調査前 (西から)	遺構検出状況 (北から)
Ⅲ層 転落石検出状況 (南東から)	写真図版 8 1トレンチ 深掘り2整地土堆積状況 (東から)
金堂基壇南面検出状況 (南東から)	深掘り3整地土堆積状況 (東から)
写真図版 3 3トレンチ	深掘り1整地土堆積状況 (北東から)
金堂基壇南面検出状況 (南西から)	写真図版 9 1トレンチ 柱根検出状況 (北から)
写真図版 4 3トレンチ	柱根検出状況 (北東から)
基壇外周遺物出土状況 (北西から)	柱根検出状況 (北西から)
金堂基壇南西角検出状況 (南西から)	
足湯穴検出状況 (西から)	
写真図版 5 2トレンチ	
調査前 (東から)	
遺構検出状況 (西から)	

写真図版 10 1 トレンチ

柱穴 1 (西から)

柱穴 2 (西から)

柱穴 3 (西から)

写真図版 11 3 トレンチ IV層出土遺物 1

写真図版 12 3 トレンチ IV層出土遺物 2

写真図版 13 3 トレンチ I ~ III層出土遺物

写真図版 14 1・2 トレンチ出土遺物



図 1 王寺町の位置

第1章 はじめに

1 調査の契機経過

既往の調査 西安寺跡は、奈良県北葛城郡王寺町舟戸2丁目に所在する舟戸神社を中心に東西約110m、南北約120mの範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地とする古代寺院跡である。昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏らによって舟戸神社が堂塔の遺址であることが報告されている。石田氏は、推定した堂塔の位置と周辺の地形、土地に伝わる俗称から西向きの法隆寺式伽藍配置を想定した。これまでに飛鳥時代～鎌倉時代の瓦が採集資料として報告されており、現在でも舟戸神社周辺には瓦の散布が認められる。西安寺は『続日本後紀』の天長10年(833)条に初めて文献にあらわれ、一名を久度寺という。創建時の記録は残っていないが、平林章仁氏は、渡来系氏族の大原史氏が創建者との見解を示している。

長らく調査の手が入ることのなかった西安寺跡であったが、平成26年(2014)度に王寺町教育委員会が遺跡範囲確認調査として第3次調査を実施し、礎石2基、心礎、四天柱の礎石抜取穴を検出し、初めて塔の遺構を確認した。翌年の第4次調査では塔跡の北側で礎石が残る基壇を検出し、金堂の遺構と推定した。西安寺跡の遺構が良好な状態で遺存する可能性が高まつたことから、王寺町では平成28年(2016)度に西安寺跡史跡整備活用委員会を組織し、西安寺跡を保存・活用していくために年次的に発掘調査を進めることとした。

その初年度の平成29年(2017)度の第7次調査では、塔跡の東面を中心に調査を実施し、乱石積基壇外装と礎石を検出した。第3次調査の成果とあわせて、基壇は一辺13.35m、塔の初層が一辺6.75mと復元し、7世紀後半とされる創建瓦と地上式の心礎を持つことから7世紀末から8世紀初頭を塔の創建時期としている。平成30年(2018)度の第8次調査では、第4次調査で確認した金堂と推定する基壇建物の調査を行った。南、北、東、三面で乱石積基壇外装、2個の礎石、5基の礎石抜取跡を検出したことから、南向きの桁行5間、梁行4間の建物であることが判明した。基壇の東西長、建物の柱間等不明な点はあるが、金堂と評価でき、西安寺は堂塔が直線上に並ぶ四天王寺式伽藍配置の寺院と考えられるようになつた。以上の調査成果により、平成31年(2019)2月22日に、西安寺跡は舟戸神社境内を範囲として奈良県指定史跡に指定されている。

調査の目的と経過 第9次調査は、金堂跡の追加調査を行い、第8次調査で不確定であった金堂の東西長を明らかにすること、堂塔を囲む回廊、講堂の遺構の有無を確認し、西安寺の伽藍について手がかりを得ることを目的としている。3トレチは、金堂南面の基壇外装を検出するために設けた調査区で、この調査区は舟戸神社の境内にあるため、奈良県文化財保護条例第45条の規定による現状変更等許可申請書を提出し、調査を行った。1、2トレ



図2 調査位置図 (1/1500)

ンチは舟戸神社の北側、東側の水田での調査区で、それぞれ塔の中軸線をもとにトレントを設定し、遺跡範囲確認調査として行った。これら3か所の調査を第9次調査としている。

調査期間は令和元年（2019）11月6日から12月20日の実働34日。調査面積は85m²である。掘削はすべて人力で行い、遺構を検出した。各トレントでの遺構を検出した段階で、西安寺跡史跡整備活用委員会の委員と検出遺構の検討を行っている。

令和元年（2019）11月29日に写真測量、空撮を行い、同年12月8日に調査成果の公開のため現地説明会を実施し、354名の参加を得た。検出遺構は砂で保護したのち埋め戻しを行い、調査を終了した。

2 位置と環境

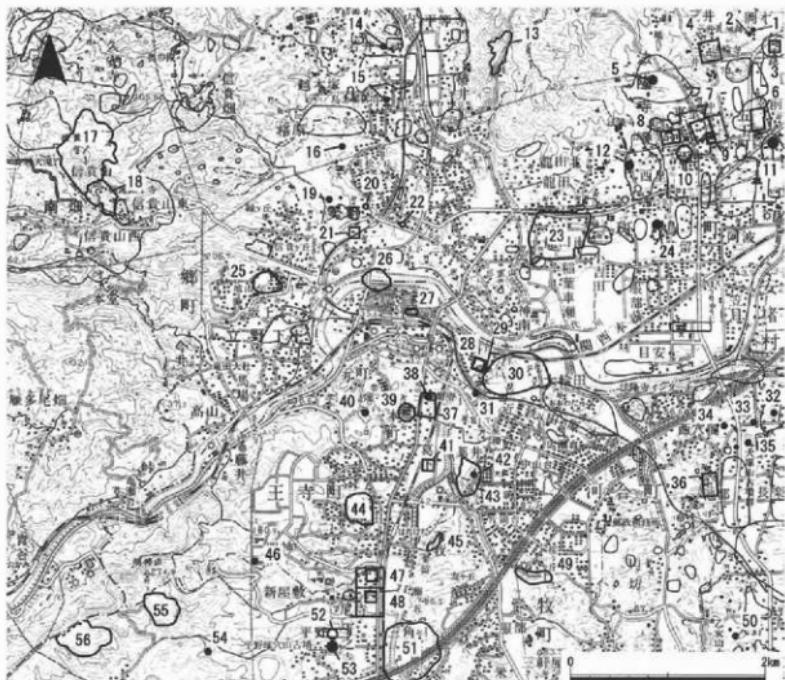
地理的環境 西安寺跡が所在する奈良県北葛城郡王寺町は、奈良県の北西部、奈良盆地の河川の水を集め 大和川の左岸に位置している。隣接する自治体には、大和川をはさんで北に三郷町、斑鳩町、東に河合町、 東南に上牧町、南に香芝市があり、西は大和川が大阪平野へと流れ出る亀の瀬で大阪と奈良の府県境となっ ている。

王寺町の地形は、河合町から延びる馬見丘陵の先端にあたる大阪層群からなる東部丘陵、大和川と町域を南から北へ流れる葛下川の沿岸に冲積層が堆積する東部低地、二上山火山群の北への延長である西部高地、東部低地と西部高地との漸移地帯で、大阪層群からなる西部丘陵にわけられる。西安寺跡は、王寺町の北東部に位 置し、東部丘陵にあたる標高約80mの舟戸山の西麓、舟戸山から延びる谷筋がひろがる傾斜地に立地する。

現在、西安寺の堂塔の遺構が残る舟戸神社は、最高所の標高が約45.5mある。周囲の田畠に比べると1～2m程度高く、境内は人為的に造成されたように見える。舟戸神社の東側は、舟戸山からの傾斜地を利用した耕作地が広がり、隣接地には水田が営まれる。境内の西端には、南北方向に流れる水路がある。境内から1.5m程地面が下がる西側は、緩斜面が続く地形で昭和40年代に住宅開発されるまでは水田が営まれていた。南側には、小学校が設置されている。この小学校は、標高67.5mの丘陵を造成し建設されたもので、本来は、 丘陵の裾が神社の間近に迫っていた。北側は神社の鳥居から60mのところに舟戸新池がある。天理大学附属天理図書館に所蔵される元文3年（1738）「御尊ニ付申上覚書」によれば、舟戸新池は享保7年（1722）に築造にされ、字名から「西安寺池」と呼称されていた。この舟戸新池を経て神社鳥居の北方250mに大和川が流れて いる。

歴史的環境 西安寺跡（28）の東方、舟戸山には舟戸・西岡遺跡（30）がある。標高70m以上の山頂一 带に遺物散在地が広がり、これまでに弥生時代後期の住居址と古代の掘立柱建物が検出されている。また、舟 戸山の最高所には古墳状の隆起が確認されている。大和川に面する舟戸山の北端は、急斜面となっており、こ れらの遺跡は大和川を見下ろす位置に立地している。西安寺跡の東側には、西安寺所用瓦を焼いたとされる西 安寺瓦窯（29）がある。すでに住宅地となっており瓦窯の遺構は確認することはできず、詳細は不明である。

西安寺が創建された飛鳥時代、推古天皇9年（601）聖徳太子の斑鳩宮の造営が行われたことを契機として、 大和川、葛下川の流域において古代寺院が造営される。聖徳太子が住まう斑鳩では、法隆寺若草伽藍跡（10） が7世紀初頭に、中宮寺跡（6）法起寺（3）・法輪寺（4）が7世紀前半に、法隆寺西院伽藍（8）が7世 紀後半から末に創建されている。古来から奈良盆地と河内平野を結ぶ経路である大和川の沿岸では、平隆寺跡（21）が7世紀前半、長林寺跡（36）が7世紀半ばから後半の創建とされている。西安寺跡の西方には、斑鳩と当麻方面を結ぶ街道が通っている。中近世には、当麻道とよばれる法隆寺から達磨寺を通り当麻寺へと至る道である。この道は、推古天皇30年（622）に斑鳩で亡くなった聖徳太子の御遺体を大阪府太子町にある畿長



- 1 瓦塚1号墳 2 三井瓦塚跡 3 法起寺境内 4 法輪寺旧境内道路 5 仏塚古墳 6 中宮寺跡 7 斑鳩宮跡 8 法隆寺西院 9 法隆寺東院
 10 若草伽藍跡 11 駒場古墳 12 藤ノ木古墳 13 桜井城跡 14 西宮古墳 15 馬島塚古墳 16 今池瓦塚 17 信貴山城跡 18 信貴山朝護孫子寺
 19 往ノ垣内瓦塚跡 20 上ノ御所瓦塚 21 平陵寺跡 22 势野葵白山古墳 23 龍田城跡 24 斑鳩大塚古墳 25 立野城 26 久度道路
 27 久度南道路 28 西安寺跡 29 西安寺瓦塚 30 舟戸・西岡道路 31 岩才池北古墳 32 城山古墳 33 丸山古墳 34 高山塚1号墳
 35 川合大塚山古墳 36 長林寺跡 37 連磨寺旧境内 38 連磨寺古墳群 39 片岡王寺跡 40 馬ヶ脊城跡 41 寺院指定地 42 葉井瀬/北邊跡
 43 香瀬・薺井道路 44 畠田城跡 45 片岡城跡 46 畠田古墳 47 尼寺北庵寺 48 尼寺南庵寺 49 下牧瓦塚跡 50 池上古墳 51 本辻城跡
 52 平野塚跡群 53 平野古墳群 54 今泉古墳 55 通透山城跡 56 七幡山城跡

図3 周辺の遺跡 (1/50000)

轟まで運んだ「聖徳太子葬送の道」として聖徳太子信仰の一つとなっている。この街道に沿っては、片岡王寺跡(39)が7世紀前半に、尼寺北庵寺(47)・尼寺南庵寺(48)が7世紀半ばから後半に創建されている。このように斑鳩からつながる道に沿ってこの周辺の古代寺院は建立されており、なかでも西安寺跡は、大和川と当麻道が交差する位置にある。

西安寺の中心伽藍のある舟戸神社は舟戸地区の氏神として地元の人々の信仰を集めている。神社の創立については不詳であるが、境内にある手水鉢には、嘉永元年(1848)、灯籠には嘉永3年(1850)の銘があることから、江戸時代後期には境内は整えられていたことだろう。祭神は天児屋根命と久那戸大神である。久那戸神は岐神、道祖神、賽の神と同じく道路や旅人などを守る神である。舟戸地区は、近世の王寺村の集落の一つで「船渡組」と表記され、当麻街道において大和川を渡る「渡し船」との関係が伺える。交通の要衝である地を守護するために勧請されたと考えられる。舟戸神社が北入りで、本殿も北向きに建てられているのは、大和川を意識したことであろう。

第2章 調査の内容

1 金堂の調査（3トレンチ）

第8次調査で検出した金堂の南面基壇外装から西に2.3m、金堂の中央間と推定する位置から基壇西端と推定する位置まで、南北幅3m、東西長8.5mのトレンチを設定した。調査箇所は、境内東端の最高所から神社の参道までの傾斜地であり、地表には東西で約1mの高低差がある。南面基壇外装は検出できたものの、基壇外装の南西角が明確ではなかったため、トレンチの北西部を拡張した。

（1）層序

I 層 表土および擾乱である。最大70cmの厚さがあり、腐葉土に瓦が混じる。西に行くほど薄くなり、参道近くでは2～3cmの厚さとなる。

II 層 近世の整地土で60～80cmの厚さでトレンチの北西部に堆積する。

III 層 中世の整地土で、東端では約90cm、西端では30cm以下の堆積となっており、層の上面が平坦でないことから、後世に削平を受けたものと考えられる。この層の下部では、乱石積基壇に使用された石材6個が出土している。

IV 層 基壇外周に堆積する砂、砂混じりシルトの水成層で、調査区西端では30cm、東端では40cmを超える堆積となっている。金堂に用いられた瓦が大量に含まれている。

V 層 金堂基壇を構築する層で、版築、乱石積の裏込め、乱石積に伴う整地土からなる。

VI 層 地山。トレンチの西端と東端の乱石積基壇に伴う整地土の断ち割り部分、トレンチ中央の北壁際、金堂基壇下で確認した。東端での標高は43.35m、西端で42.96m、金堂基壇下での検出面が最も高く43.52mある。

（2）検出遺構

基壇外装 東西方向に7.6m分の乱石積基壇外装を検出した。トレンチの東側では、3段、高さ66.0cmと最も残りが良い。トレンチの中央では大きな削平を受けており、石積みが失われた箇所もあるが、概ね1段の石積みが残存している。西端の石積みは抜き取られており、外装南西角を確認することはできなかった。石材は、これまでと同様に花崗閃緑岩、片麻状黒雲母花崗岩、角閃石安山岩等が使用されており、石材とともに埴2点が使用されていた。

外装の内側では、2種の裏込めが確認できた。裏込め1は、外装の石積みが残る東西端に認められ、瓦が多く含まれる。裏込め2は、擾乱を受けた基壇外装の残りが悪いトレンチの中央で確認しており、固くしまっている。このことから、基壇外装の積み直しが行われたことがわかる。

第8次調査で確認したように、金堂の外装の下端には整地土が堆積している。整地土は、乱石積の下端から外側へ約70cmの位置にまで堆積し、なだらかな傾斜がつけられている。トレンチ東端の断ち割りでは、地山の上に厚さ30.2cmの整地土をした後に石積みがなされていることを確認した。トレンチ東半の整地土は、単弁蓮華文軒丸瓦や凝灰岩を含む粘土層、中央から西側にかけては、6～8mm程度のバラスが混じる土が使用され、瓦が混入している。この整地土は地山の高低差を解消させ、乱石積の基底のレベルを揃えるために造成されたものと考えられる。調査区北西隅では、整地土が西側へ傾斜する状況を確認した。

基壇外周 基壇外周ではIV層から瓦が集中して出土している。確認できただけでIV層の厚さは40cmの堆積があり、その下にも瓦の堆積は続いている。IV層からは、均整唐草文軒平瓦が軒先を基壇側に向かって、凸面を上にして出土するものが多く、同種の軒平瓦は第8次調査の金堂南面の基壇外周でも確認している。トレンチ幅も狭く、瓦の量も多いのでIV層を掘り切ることができなかった。IV層の下層には、第8次調査で検出した基

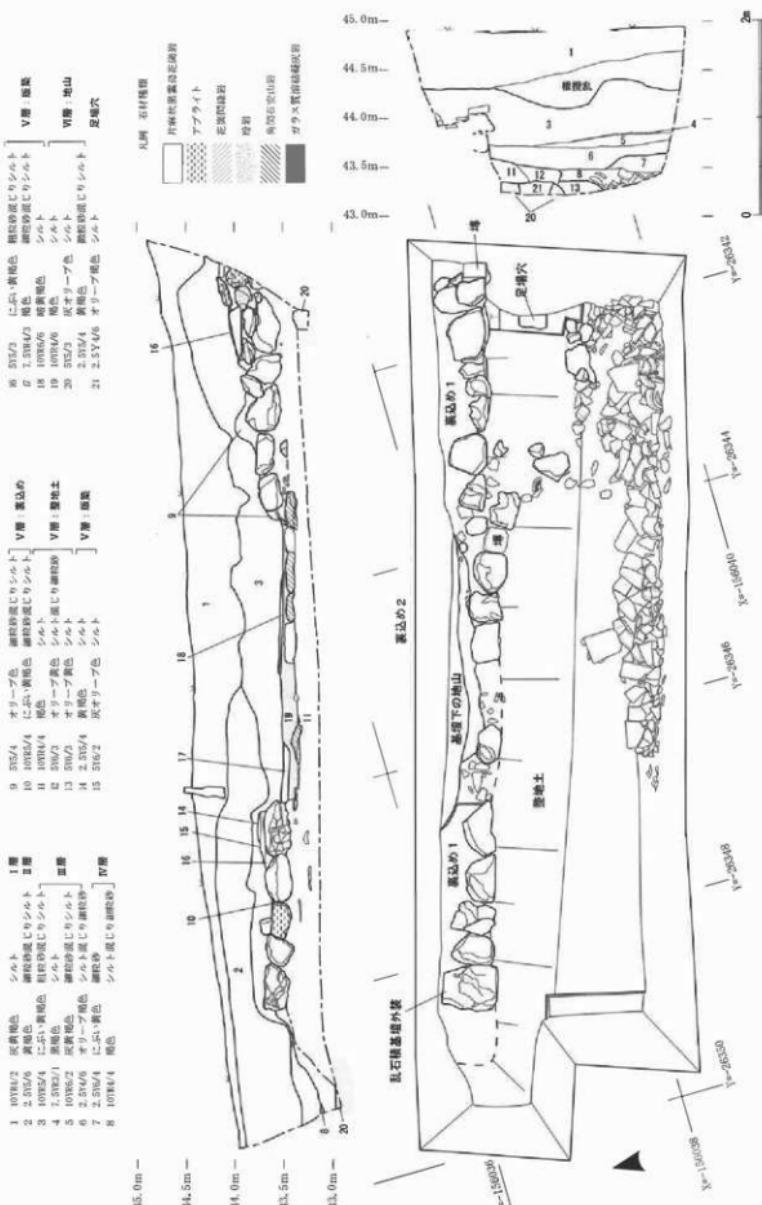


図 3 テレンチ検出構造平面図・基壇外装立面図・東壁土層断面図 (1/50)

壇外周の瓦堆積層（第8次調査Ⅶ層）に相当する堆積層があると考えられるが、確認できていない。

足場穴 トレンチ東端の断ち割り内の地山上では、乱石積の外側45.0cmの位置で南北長約29cmの柱穴を検出した。足場穴とみられる。

(3) 出土遺物

3トレンチからはコンテナ161箱の遺物が出土し、特に基壇外周に堆積するIV層からは金堂に所用された瓦が多量に出土している。

IV 層 1は、瓦当が欠損した軒丸瓦である。丸瓦部は行基丸瓦で残存長は40.2cmある。瓦当の剥離部分の凹面には布目痕、凸面には丸瓦製作時のヨコナデ、広端には縦方向に平行する3本の沈線が刻まれており、先端に加工は施されていない。丸瓦部の凸面は瓦当接合時に付加した粘土とともに縦方向のなでで調整されている。凹面は布目痕があり、瓦当側は縦方向のなでが施され、そのなでが数条、狭端側へ伸びられ布目痕を消している。丸瓦部の中央には釘孔が穿たれている。広端幅は約18.0cmあり、これまでに確認できている軒丸

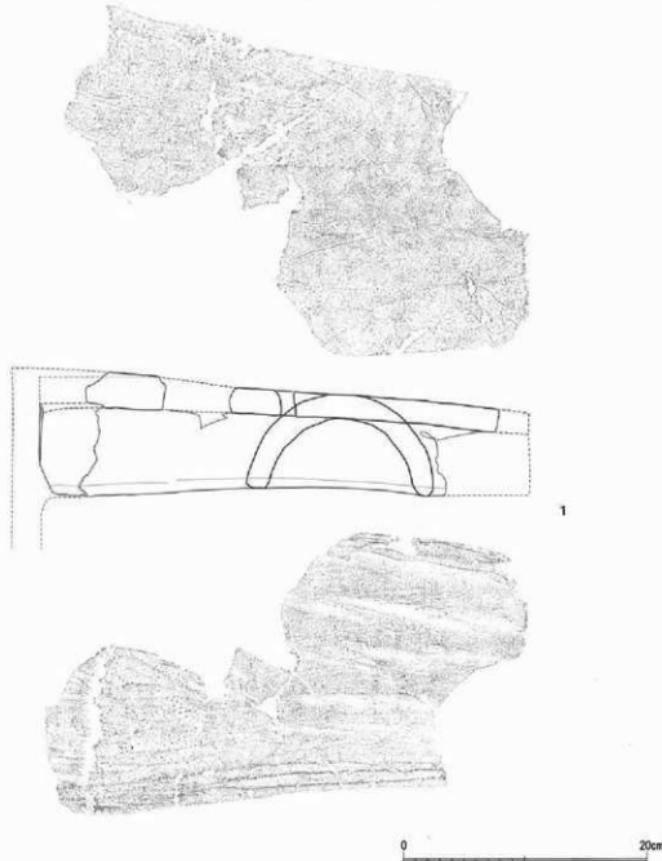


図5 3トレンチIV層出土遺物実測図1 (1/4)

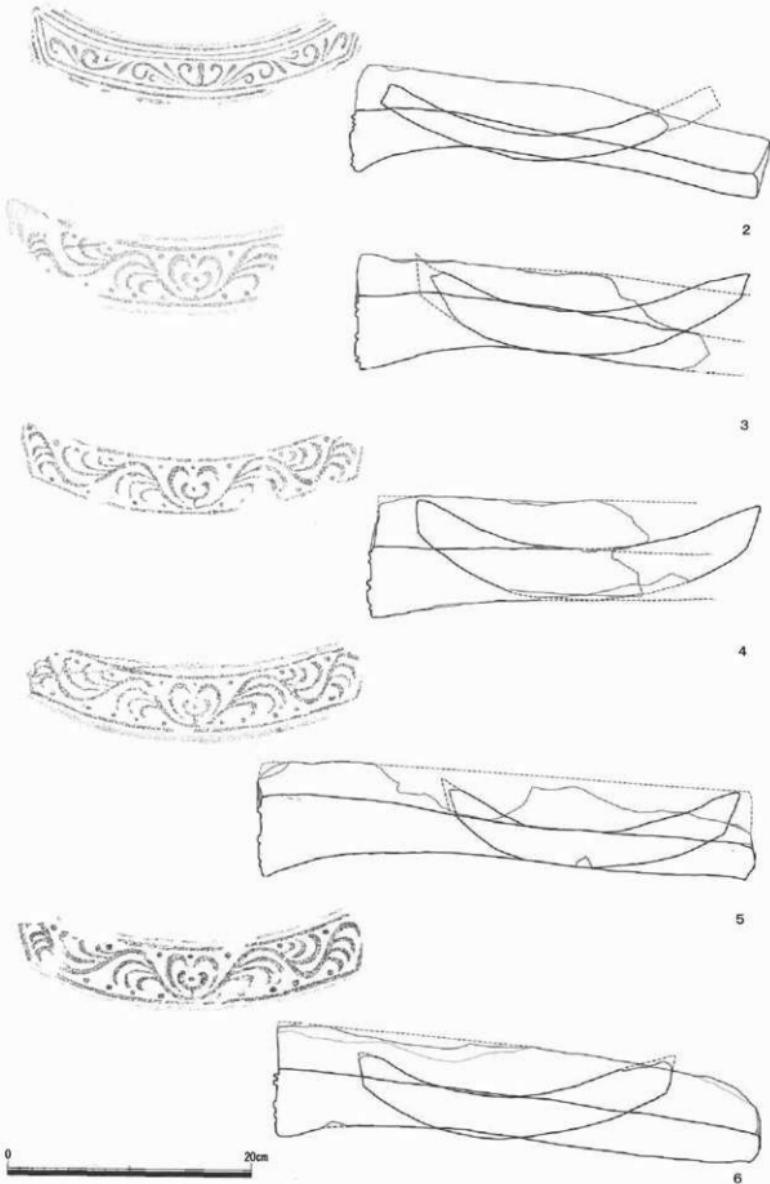
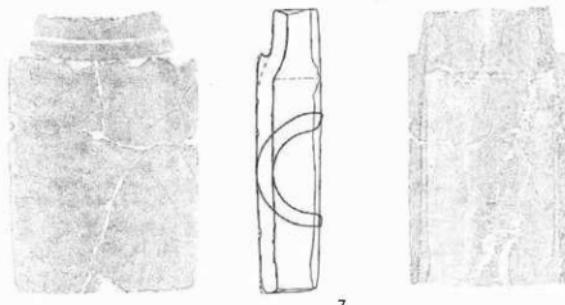
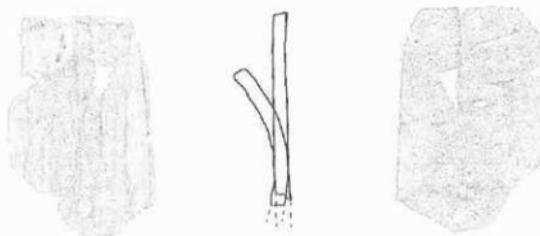


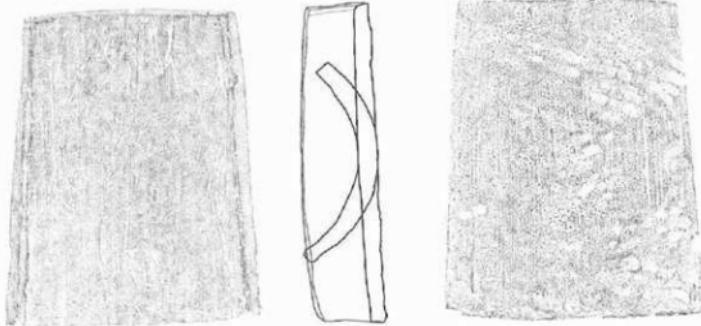
図6-3 ドレンチIV層出土遺物実測図2 (1/4)



7



8



9

0 30cm

図7 3 トレンチIV層出土遺物実測図3 (1/6)

瓦では、斑鳩7Abと同范が確認された素弁8弁蓮華文軒丸瓦と大きさが一致し、接合するものと考えられる。色調は5YR6/2灰白色、焼成は堅緻である。

2は内区に棒形と上向き唐草文が一体となった中心飾りに唐草文が3回反転し、外区に3重圓線が巡る。顎形態は曲線類で、全長33.6cm、瓦当上端幅は29.5cm、狭端幅27.2cmの一枚作りの均整唐草文軒平瓦である。凹面の瓦当側はよこなで、平瓦部は、縱方向のなでで糸切り痕、布目痕が消されている。凸面は、縱方向のなでが施されるが、縄タタキの痕跡があり、瓦当面から6cmの位置に最大幅2.5cmの朱線が残る。色調は7.5Y7/1灰白色、焼成は良好である。文様の構成は平城6663、6681に類似するが三重圓線で外縁がない点、退化した中心飾りであることから、8世紀後半の年代が考えられる。3～6は均整唐草文軒平瓦で刺又形の中央に珠文、上向の唐草文の中心飾りの左右に唐草文が3回反転する。凸線による圓線で囲まれた内区の上下端には唐草文の合間に珠文が施されており、外区の幅は個体により違う。顎形態は、直線、曲線の2種が認められる。3、5の瓦当面の左側に斜線のように見えるのは、范傷で4、6には范傷がない。瓦当幅29cm前後、瓦当の厚さは5～6.5cm、狭端幅は約24cm、全長は約40cmあり、胎土には、長石を多く含んでいる。凹面には糸切り痕、布目痕があり、凸面と側縁は瓦当から狭端へ向かってケズリを行っている。側縁に布目痕が残る個体、凹面から側縁、狭端面を経て凸面まで布目が続く個体があり、凸形成台で製作されたものと考えられる。狭端側には、製作時の手指圧痕が残っている。出土する平瓦にも側縁、狭端に布目痕を残すものがあり、同時期に製作されたものと考えられる。また、軒平瓦の凸面には、瓦当面から約7～8cmの位置に幅1～2cmの朱線が残存しており、この瓦が葺かれたのは木部への朱塗りがともなう大規模な修理が行われたときと考えられる。この均整唐草文軒平瓦は、これまで平安時代前期のものと報告していたが、西安寺跡以外での類例が確認できず、検討が必要であり、平安前期～中期の幅を持たせておく。

7は玉縁丸瓦である。全長35.1cm、玉縁長5.6cm、玉縁部には肩部から上方2.5cmの位置に幅0.6cmの水切溝が施される。凸面は縄タタキのち縦方向のなで、凹面は細目の布目痕が残り、右側に布袋の縫い合わせが確認できる。色調は5Y7/1灰白色、胎土は4mm以下の砂粒を含み、密である。

8、9は平瓦である。8は桶巻き作りの平瓦で狭端側の角を斜めに切断している。凸面は縦位の縄タタキの後よこなでを加え、縄タタキの痕跡は薄く残る程度である。凹面には横骨痕、糸切り痕、細目の布目痕がある。残存する部分が少ないが、同種の平瓦の出土例から全長39cm、広端幅29cm、両隅をカットした狭端幅は23cmと復元できる。4V6/1灰色で焼成は堅緻である。9は全長39.5cm、狭端幅22.0cm、広端幅28.5cm、厚さ1.9～2.4cmの平瓦である。凸面には縦位の縄タタキ、全面に離れ砂が認められ、手指圧痕がある。凹面には糸切り痕、やや粗目の布目痕があり、狭端、側縁にはヘラケズリが施される。明確な模骨痕、布袋、粘土板の合わせ目も確認できないため、一枚作りの平瓦と考えられる。5Y3/1オリーブ黒色で、焼成は良好である。

I～III層　図8の12、13がI層、14、17がII層、その他はIII層から出土した軒先瓦である。10は素弁8弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当径は17.8cm(復元)、厚さは2.1cm。中房の周りに凹線が巡り、中房の縁に外側の蓮子が配される。色調は2.5Y8/3淡黄色で焼成は軟質で、同じ文様の軒丸瓦は片岡王寺跡からも出土している。11、12は素弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房の周囲に凹線が巡り、中房には1+8の小さい蓮子を配するものである。丸みを帯びた蓮弁の縁は凸線で表現され、蓮弁中央に鑄があり、弁端は肥厚する。色調は11がN4/0灰色、12が5Y5/1灰色で、2点とも焼成は堅緻である。13、14は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、13は塔、金堂の創建瓦とする1+4+8の蓮子を持つものである。外縁部分を欠損しており、丸瓦との接合部で剥離している。瓦当裏面は渦巻状に、接合部は丸瓦の凹面に沿ってなでを施している。2.5Y6/2灰白色で焼成は良好である。14は瓦当径19.7cm、中房径は6.8cm、1+8の蓮子を持つ片岡王寺式の軒丸瓦で、色調は5Y6/1灰色、焼成は良好である。15、16は三頭左巻巴文軒丸瓦で割れた范を使用して製作されたものである。中央に珠文を持つ。17は三頭右巻巴文軒丸で、瓦当径13.9cm、内圓線に巴の尾はつかない。珠文は17個(復元)と見られる。18は

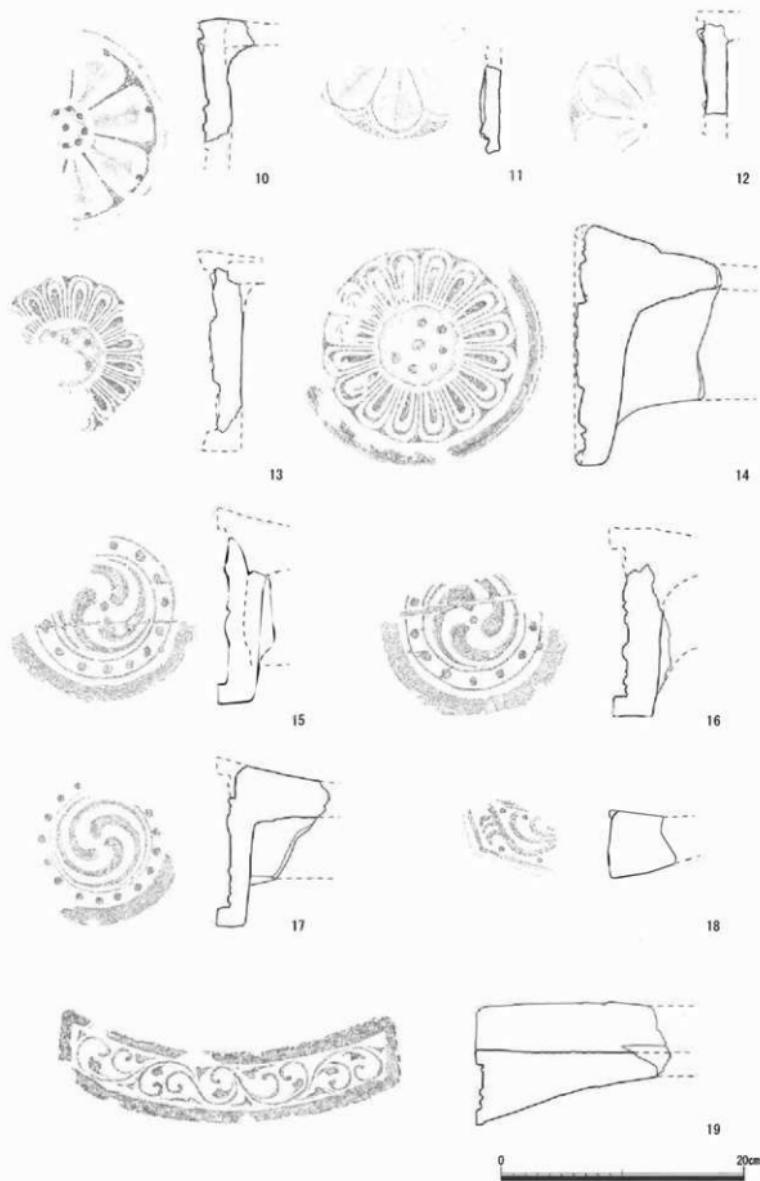


図8 3トレンチI～III層出土遺物実測図 (1/4) 12・13 I層 14・17 II層 その他III層

IV層から出土している均整唐草文軒平瓦と同様で范傷のないものである。19は中心飾りのない均整唐草文軒平瓦で瓦当幅は27.2cm、瓦当厚は6.1cm。頸は曲線類である。凹面は糸切り痕、布目痕、凸面は瓦当側はよこなで、平瓦部は縦方向のなでが施されている。5Y5/1灰色の色調で、焼成は良好である。

2 回廊の調査（2トレンチ）

堂塔の東側に回廊の有無を確認するため、南北幅1m、東西長15mのトレンチを設定した。水田耕土を除去したのち、北壁側の幅50cmを先行して掘削し、トレンチの西半で南北方向に延びる地山の高まりと3条の溝、瓦を多く含む包含層を検出した。これらの遺構の確認のため、調査区を東西方向に10mの区間だけ、南側へ1.5m幅で拡張した。III層上面を検出し、瓦の出土の少ない部分ではIV層地山上面まで掘削し、遺構の確認を行った。

（1）層位

I 層 厚さ約20cmの水田耕土である。
 II 層 水田耕土下の粘土層。東端の層の厚さは15cm、西へ行くほど厚みが増し、西端では約55cmの厚さで堆積する。層内の下部では砂粒の混入が多い。12～13世紀の土師器皿、瓦器碗、瓦質土器が出土し、境内側の西半部での瓦の出土が多い。中世～近世の堆積層である。

III 層 トレンチ中央西寄りのIV層上に堆積する厚さ20cmの細粒砂混じり粘土層で、多量の瓦を包含する。

IV 層 地山。トレンチ東端で標高43.6m、西端では43.32mで検出している。

（2）検出遺構

東回廊 上端幅4.8m、西側の雨落溝底からの高さ27cmの南北方向に延びる高まりを検出した。東回廊の基壇と考えられる。基壇の上層には瓦を含む堆積層があり、版築等の整地土は認められない。基壇上面には、後世の溝、大形土坑があり、検出した範囲では、礎石、礎石抜取穴、柱穴などの遺構は確認できず、上部構造については不明である。基壇は、東から西へと傾斜する地山に溝を掘り込み、回廊を構築した



図9 2トレンチ検出遺構平面図・北壁土層断面図(1/100)

と考えられる。回廊基壇の上面の標高は43.31～43.35mである。

雨落溝1 トレンチの西端、東回廊基壇の内側で検出した南北方向に延びる溝である。溝の西脇はトレンチ内で確認できず、溝幅は不明である。溝底は回廊寄りにあり、溝底の幅は1.22m、深さは基壇上面から27cmを測る。北壁から1m幅分の掘削を行い、行基丸瓦、玉縁丸瓦、桶巻作りの平瓦が出土している。

雨落溝2 幅3.07m、東回廊上面からの深さは16cmの南北方向に延びる溝で、灰色シルト混じり中粒砂が堆積し、回廊外側の雨落溝と考えられる。幅1m分の掘削を行い、忍冬蓮華文軒丸瓦、丸瓦、平瓦、須恵器の甕、11世紀後葉～末頃の土師器皿が出土している。

溝2 幅58.5cm、深さ29.7cmの南北方向に延びる溝である。Ⅲ層上面の遺構で、東回廊に伴うものではない。埋土は、灰色細粒砂混じり粘土である。瓦が出土したが、年代を特定する遺物の出土はなかった。

土坑 東回廊基壇上の東西長2.59m、南北長1.77m超の楕円形の土坑。埋土は黒色粘土で、湧水がある。検出のみで掘削は行っていない。

(3) 出土遺物

雨落溝2 20は忍冬蓮華文軒丸瓦である。蓮弁と忍冬文が一対残存する破片で、パルメットの右先端が珠文に接着する点が特徴的である。同範関係が知られる東京国立博物館保管の宗元寺出土瓦と帝塚山大学附属博物館所蔵の西安寺出土瓦にもこの特徴が認められるが、20には同範品にある范傷が認められない。また、第7次調査出土例との同範を確認できる部分ではなかった。瓦当裏面は丸瓦との接合部で剥離しており、剥離面から丸瓦の先端を加工した痕跡は認められない。接合部の下は丸瓦の形状に沿う様になでを施している。色調は5Y6/1灰色、胎土に石英、長石を含み、焼成は良好である。21、22は土師器の皿である。両者とも10YR8/2灰白色を呈し、摩滅が激しいが口縁は外反しており、ての字口縁を持つものと考えられる。

II層 23は素弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当径は17.7cm(復元)、瓦当厚は1.8cmと薄手である。色調はN6/0灰色、砂粒を含まない密な胎土で焼成は良好である。瓦当面には木目の范傷が残り、これまでに出土する同文様の瓦と同範である。24は土師器皿で切り込み円板技法が使用されている。口径9.2cm、器高1.4cm、色調は10YR7/4にぶい黄橙色である。

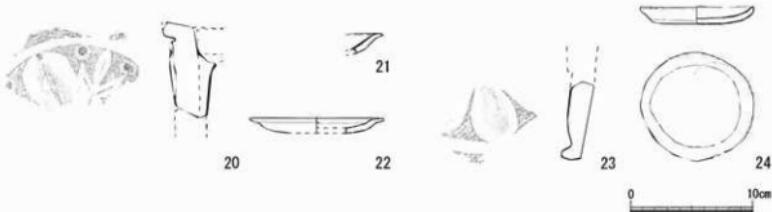


図10-2 トレンチ出土遺物実測図(1/4)

3 金堂北方の調査(1トレンチ)

金堂の北側に講堂、回廊の遺構の有無を確認するために設定した東西幅1m、南北長25mのトレンチである。初めに、層位を確認するためにトレンチ南北両端で掘削を行った。南端では地表下34cmで地山を検出し、北端では地表下1.2mまで掘削したもの地山には当たらず、版築状の整地がなされている状況を確認した。整地土上面を検出しながら、この整地の範囲を押さるために2か所の深掘りを追加した。整地土上面での遺構検出を試みたが、トレンチ幅も狭く遺構を把握することができないため、トレンチの南端からトレンチ中央の

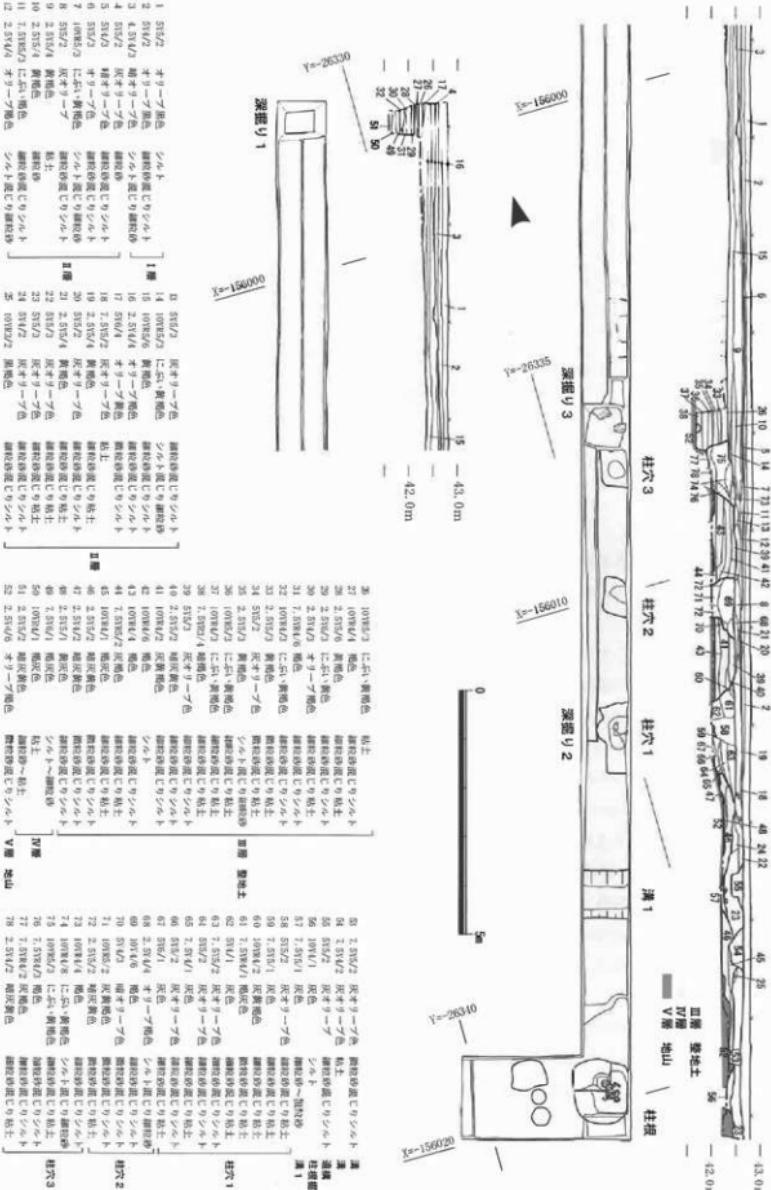


図 11 1 トレンチ検出遭構平面図・東壁土層断面図 (1/100)

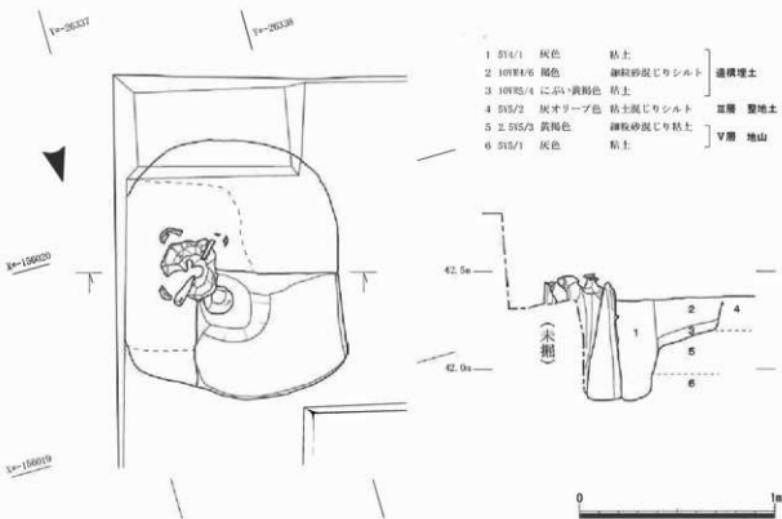


図12 柱根検出遺構平面図・土層断面図 (1/25)

深掘り3までの整地土を掘削し、地山上面で遺構検出を行った。また、トレンチ南端では柱根が検出されたため、南北幅1.7mの区間で、西へ2.5mを拡張し、関連遺構の確認を行った。

(1) 層位

I層 水田耕土で10~30cmの厚さで堆積する。平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器が出土した。

II層 西安寺廃絶後から水田耕作が行われるまでの堆積層で厚さ14~45cmで堆積する。北半での堆積が厚く、南半では溝等の遺構を確認している。遺物の出土は金堂に近いトレンチ南部が多く、平瓦、丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、巴文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、土師器皿、須恵器杯蓋、瓦質土器が出土した。

III層 東南隅をのぞくトレンチ全体に広がる整地層である。トレンチ中央の深掘り3で64cm、北端の深掘り1で47cmの厚さがあり、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器が出土する。

IV層 トレンチ北端の深掘り1で確認した水成堆積層である。整地土の下層に砂層と粘土層が互層となって堆積しており、標高41.82mで上面を確認している。

V層 地山。南端では2層の下の標高42.26m、トレンチの中央では41.57mで検出している。北端の深掘り1では地山は確認していない。西安寺跡第1次調査、第5次調査では、地山上に河道の検出例があることから、トレンチ北端付近には、河道、または谷地形が存在することが予想される。

(2) 検出遺構

整地土 トレンチの東南隅をのぞく全城で整地土を確認した。南端からトレンチ中央の深掘り3までの整地土の上面は標高42.5m前後で、深掘り3以北は42.2~42.4mとやや低くなっている。トレンチの南端から北へ2.7m付近から地山の傾斜が始まると、北方へ向けて整地は厚くなる。深掘り1、3で薄層を重ねる版築の特徴が顕著であった。深掘り2からはTK217の須恵器杯蓋、深掘り1からは飛鳥II期の須恵器杯蓋II、土師器皿が出土しており、版築による整地は7世紀後半に行われたと考えられる。また、出土した平瓦の破片には、西安寺跡第8次調査の金堂基壇外装に伴う整地土層から出土した飛鳥前期の素弁蓮華文軒丸瓦と胎土と同じくするものがある。

柱 棟 トレンチの南端、金堂の基壇外装北端から 6.96 m の位置で検出した。南北長 1.33 m、東西長 1.44 m 超の隅丸方形の掘方がある。直径約 33 cm、残存長 62.2 cm の柱根が中央にあり、それを囲むように 4 本の添柱が設置されている。中央の材はヒノキ、添柱の 4 本はコウヤマキが使用されている。掘方の 1/4 を掘削して検出した添柱の根元の直径は約 15 cm、残存長は 61.1 cm で、上部は中央柱側が斜めに切断されている。添柱は中央の柱より 4 cm ほど深く埋められており、礎板等は認められない。掘方のうち、中心の柱根と添柱を中心とした南北長 85.9 cm、東西 72.6 cm の隅丸方形の範囲で埋土が変色していた。柱根は塔の中軸線に合わせたトレンチのほぼ中央で検出したため、鐘竿、鐘竿支柱を想定し、拡張可能な西側に調査区を広げ遺構検出を行ったが、関連する遺構はなかった。

柱 穴 3 基の柱穴を確認した。3 基とも整地土上面からの掘り込みである。柱穴 1 は深掘り 2 の位置で検出した。掘方の南北長は 1.5 m、柱痕跡の南北長は 70 cm、柱穴の底には根石と思われる石 3 個がある。柱穴 2 の掘方は南北長 74 cm、柱痕跡の南北長 38 cm、東壁では柱痕跡が肥大することから抜取りの痕跡とみられる。柱穴 3 は掘方の南北長が 1.2 m あり、東壁断面に柱痕跡は認められず、平面で直径 36 cm の柱痕跡が残る。3 基の柱穴は、直線上に 2.73 m の等間隔で並んでおり、これより北の整地土上でも柱穴掘方らしき遺構が認められたが、トレンチ幅も狭く確定することはできなかった。

溝 柱根と柱穴 1 の間で検出した幅 50.1 cm、深さ 14.7 cm 以上の東西方向の溝である。灰色細粒砂から粗粒砂が堆積し、瓦が出土した。

(3) 出土遺物

整地土 25～27 は深掘り 1 から出土した。25 は土師器付杯 C で内面に一段の暗文がある。口径 9.8 cm、器高 3.4 cm に復元でき、径口指数は 28.8 である。色調は 5YR7/6 橙色で、胎土は精製されている。26 は須恵器杯 H 蓋。口径 9.2 cm、器高 3.2 cm、径口指数 28.75 である。7.5GY6/1 オリーブ灰色で焼成は良好である。27 は須恵器杯 G 蓋で口縁部のみの小片。28 は須恵器杯 G 蓋である。深掘り 2 の掘削時に出土している。深掘り 2 は柱穴 1 の掘方と重複する位置にあり、掘削時には柱穴との認識のないまま掘削しており、柱穴の遺物の可能性もある。直径は 9.7 cm、器高 3.3 cm でつまみ上面は押圧により凹んでいる。TK217 型式である。

柱根据方 柱根の掘方の土を持ち帰り洗浄したところ、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、石が出土した。いずれも小片であるが、須恵器の杯蓋には墨書の痕跡があり、8世紀前後の所産とみられ、立柱の時期を示すものである。

II 層 30、31 は宝珠つまみを持つ須恵器の杯蓋である。31 は大きくひずんでいるが、口径 14.9 cm、器高 2.9 cm を測る。飛鳥 V 期の頃か。32 は須恵器碗の破片で高台が残る。

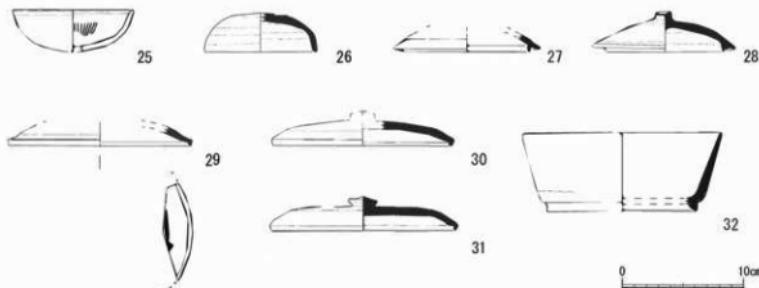


図 13-1 トレンチ出土遺物実測図 (1/4)

第3章 まとめ

伽藍の中軸線 これまでの調査で検出した塔、金堂に加え、今回の調査では、堂塔の東方で南北方向に延びる東回廊とその内外に並走する雨落溝、金堂の北方では版築状の整地土上に柱根、柱穴列を検出した。これらの遺構の位置関係を確認すると、塔の心礎、柱根、柱穴が直線上に並び、その並びは座標北から15.8度東に傾いている。この傾きに対して検出した金堂基壇南面の基壇外装と塔の基壇はほぼ直交する。また、東回廊の内側の雨落溝と第8次調査の2トレンチの東端で検出した溝はこの傾きに平行しており、雨落溝として繋がっていく。このように、検出した各遺構の位置、傾きが整合することからN15.8°Eを西安寺の中軸線とする。

金堂 金堂について第4、8、9次の3次の調査を行ってきた。金堂の基壇は、最も残りがよい所で標高44.4mあり、地山上に約80cmの版築をして構築されている。基壇の高さは周囲の地形の状況により、1~1.45mと各面で異なっている。花崗岩を主体とした乱石積基壇外装は、1~4段の石積みが残存しており、北面で0.9m分、東面で1.5m分、南面で12.6m分を検出した。乱石積は地山の上に整地をしたのちに築かれており、その幅、厚さは各面で違う。地山の高低差を整地土で補ったうえで外装の構築を行ったとみられる。基壇の西半は削平を受けており、西面の基壇外装は確認できていない。伽藍の中軸線を基準に東面の基壇外装を西に反転させ推定すると、西面の整地土の堆積する位置に一致するので、基壇東西長は46.9尺(14.07m)に復元できる。南北長は検出した基壇外装から40.6尺(12.18m)である。

基壇上では、東面の側柱列の礎石2個、礎石抜取穴3基、入側柱にあたる礎石抜取穴2基を検出した。基壇に配置できるのは、東西3間、南北2間の四面庇の建物であり、基壇の出は6.5尺(1.95m)で確定できるため、建物の桁行(東西)は34尺(10.2m)、梁行(南北)は27.6尺(8.28m)となる。2個の礎石から、梁行の身舎の柱間は6.3尺(1.89m)と考えられるため、庇の柱間は7.5尺(2.25m)と推定できる。この庇の寸法を桁行に当てはめると、中央間と脇間の3間は6.3尺(1.89m)の等間に配分できる。造営尺は塔と同じく1尺30.0cmと考えられる。

金堂の創建時期は、塔の創建瓦とした単弁16弁蓮華文軒丸瓦の出土が多く、塔と同時期か少し早い7世紀後半と考えてきた。第9次調査で金堂の方が7世紀後半に造成されていることが判明したことからも7世紀後半に行われた寺域の整備にともなって、現在検出している金堂、塔が創建されたと考えられる。しかし、金堂の周囲からは飛鳥時代前期の瓦が出土し、北方の整地土にも瓦が混入することから寺域の整備以前にも瓦葺の建物が存在している。基壇内部の調査を行っていないため不確定ではあるが、全調査を通して二上山で産出される凝灰岩が出土し、塔金堂の基壇外装に転用されていることから、凝灰岩による切石積基壇外装の基壇が想定できる。金堂は基壇外装の積み直しや、数度の屋根の修復が行われており、南面の基壇外周の金堂所用瓦の埋没状況から平安時代前期~中期の修復を最後に倒壊し、廃絶したと考えられる。また、金堂の南面では明確な階段遺構が確認できていない。木製の階段の可能性も考えられるが、金堂の正面がどちらを向いているのかを明らかにすることは今後の課題である。

西安寺の伽藍 第9次調査で確認した東回廊を中軸線を基準として西へ反転させると、舟戸神社の参道が西回廊、舟戸神社の西側にある用水路が外側の雨落溝にあたる。現在、舟戸神社と西側の隣地は水路によって明確に区画されており、西安寺の遺構が現代の地形に残ったものと考えられる。回廊外側の雨落溝で東西幅を復元すると約37.5mとなる。回廊内は、堂塔の基壇から回廊までの距離が5~6mと手狭な空間であった。塔金堂の基壇外周では、明確な雨落溝が検出されておらず、基壇外周が外装袋から外側へ傾斜して下がっていく状況から塔の雨水は回廊内側の雨落溝に集水し、排水していたと考えられる。

金堂の北側では回廊の遺構は確認されず、塔、金堂だけを囲む回廊は設置されていない。金堂の北方で検出

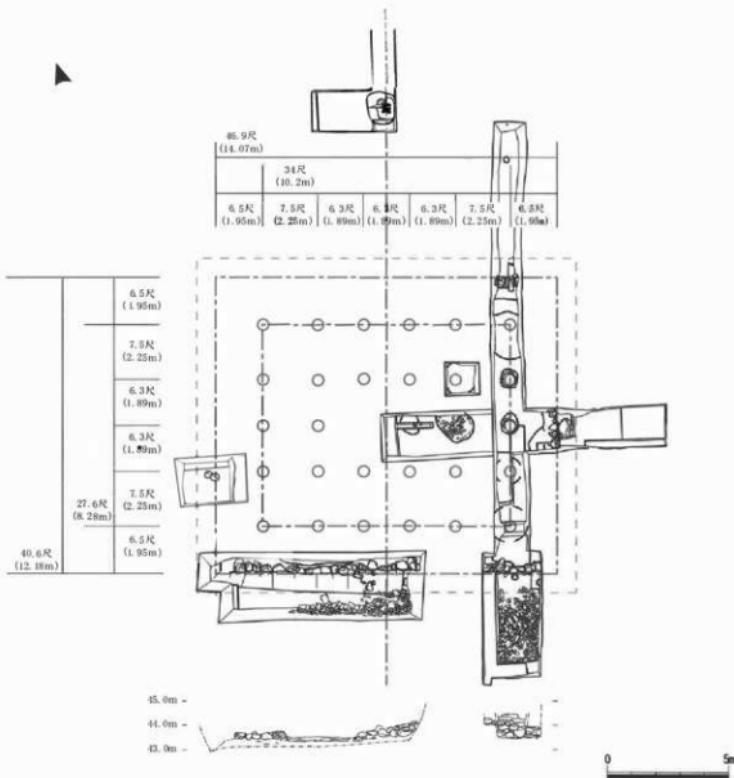


図14 金堂検出遺構平面図・南面乱石積基壇外装立面図・復元図（1/200）

した柱穴は、中軸線上に並ぶことから偶数間の建物が想定される。掘立柱建物の講堂となれば、西安寺の伽藍配置はこれまでに推定する通り四天王寺式である。

また、金堂の北側で検出した柱根は、西安寺の伽藍を考える上で重要な遺構である。現在のところ、この柱根は伽藍の中軸線上に単独で建つことから、木製燈籠と考えられる。これまでに各地で検出された石製燈籠、木製燈籠遺構の事例をみる限り、燈籠は金堂の前に設置されている。今回の調査では金堂の南面では明確な階段遺構が検出されていないため、金堂が北面していたとも考えられ、柱穴列は中門の遺構とも想定できる。西安寺が立地するのは、東と南に馬見丘陵から派生する山が迫るところで、特に南側は狭小な空間となっている。一方、街道の通る西側、大和川の流れのある北側は緩やかに下がっていく土地が広がる。西安寺の造営された時代には、大和川は難波と飛鳥を結ぶ道として殊に重要なもので、大和川を意識して造営したことが考えられ、基本は四天王寺式の伽藍配置であるものが、北向きの寺院として機能していた可能性も想定できるだろう。

今後の調査　今回の調査で、堂塔の周囲の遺構を確認し、西安寺の伽藍を具体的に推定できるようになつた。しかし、不明な点は多く残る。今後は、西回廊、中門の遺構を確認し、伽藍の方向を明らかにできるよう調査を進めて行きたい。

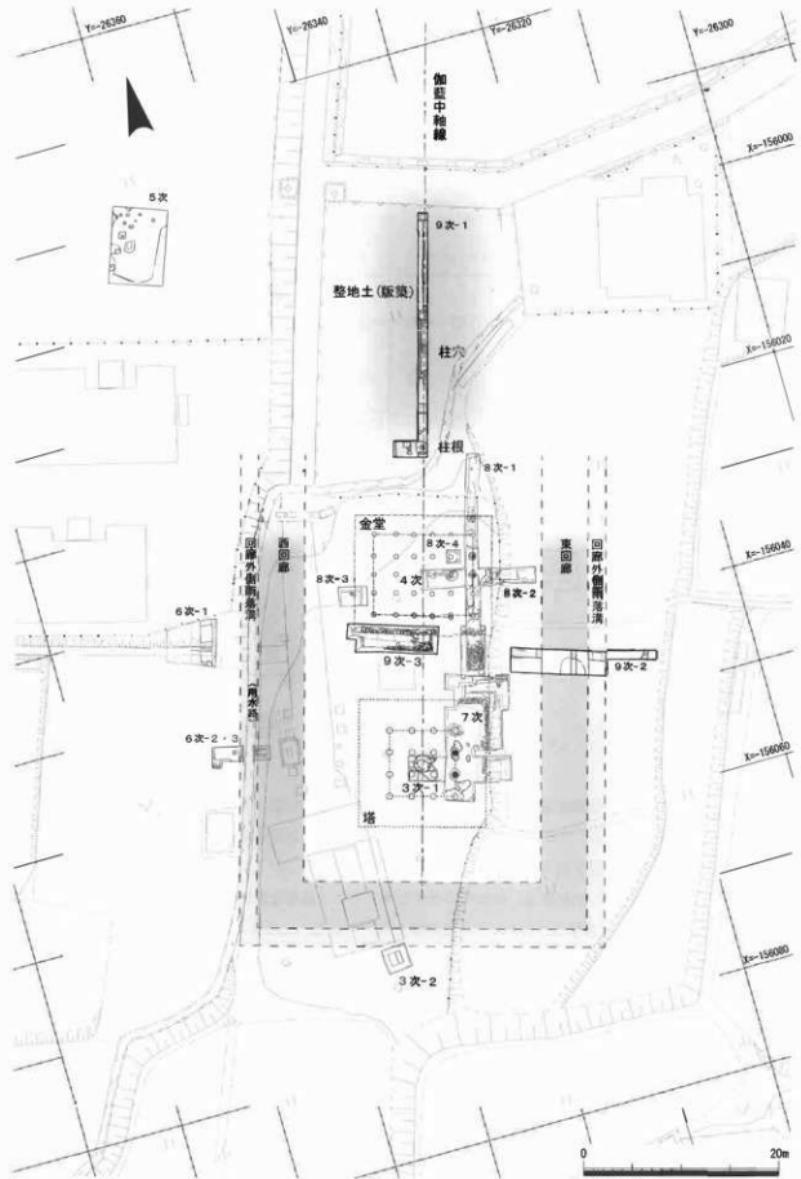


図15 伽藍想定図 (1/500)



調査地全景（上空から）



調査前（西から）



Ⅲ層 転落石検出状況
(南東から)



金堂基壇南面検出状況
(南東から)



金堂基壇南面検出状況（南西から）



基壇外周遺物出土状況
(北西から)



金堂基壇南西角検出状況
(南西から)



足場穴検出状況
(西から)



調査前（東から）



遺構検出状況（西から）



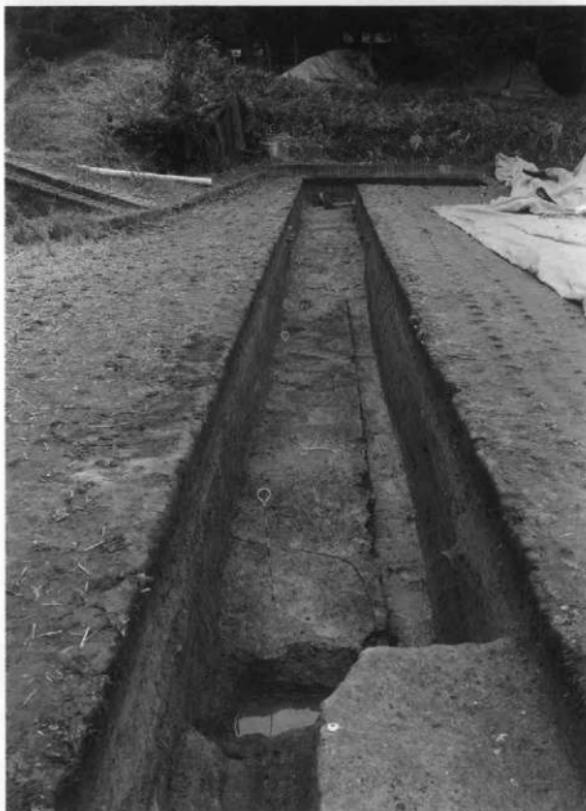
東回廊・回廊内側雨落溝検出状況（南東から）

東回廊・回廊外側雨落溝検出状況（南西から）





調査前（北から）



遺構検出状況（北から）



深掘り 2 整地土堆積状況
(東から)



深掘り 3 整地土堆積状況
(東から)



深掘り 1 整地上堆積状況
(北東から)



柱根検出状況（北から）



柱根検出状況
(北東から)



柱根検出状況
(北西から)

柱穴 1 (西から)



柱穴 2 (西から)



柱穴 3 (西から)





2



3



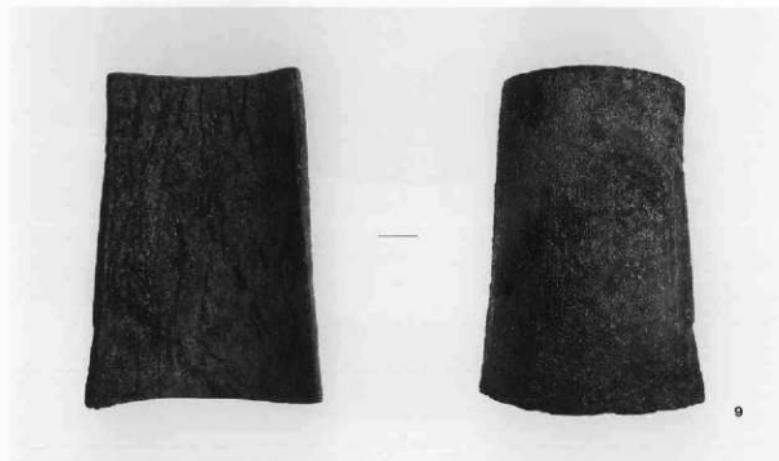
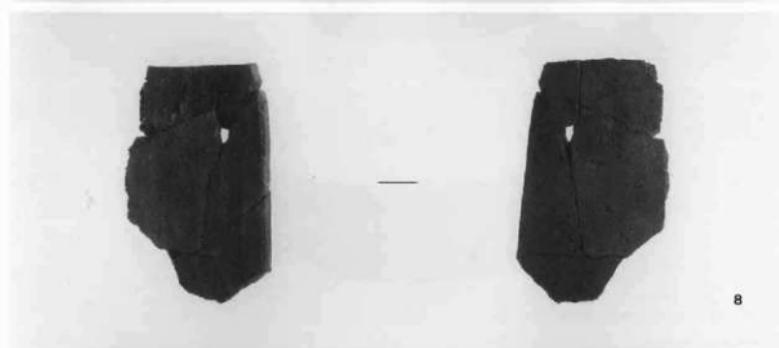
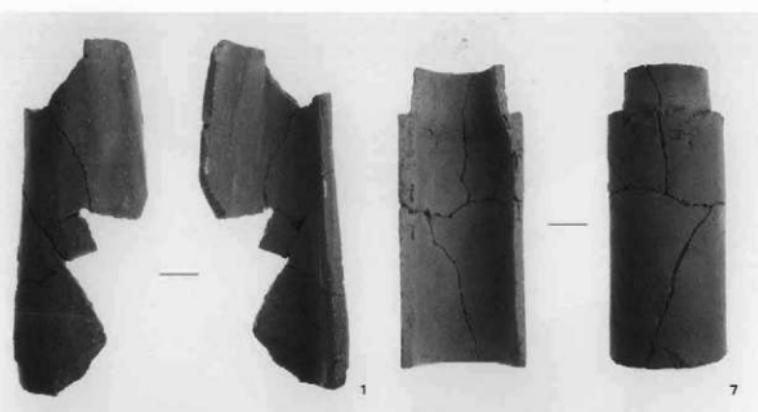
4



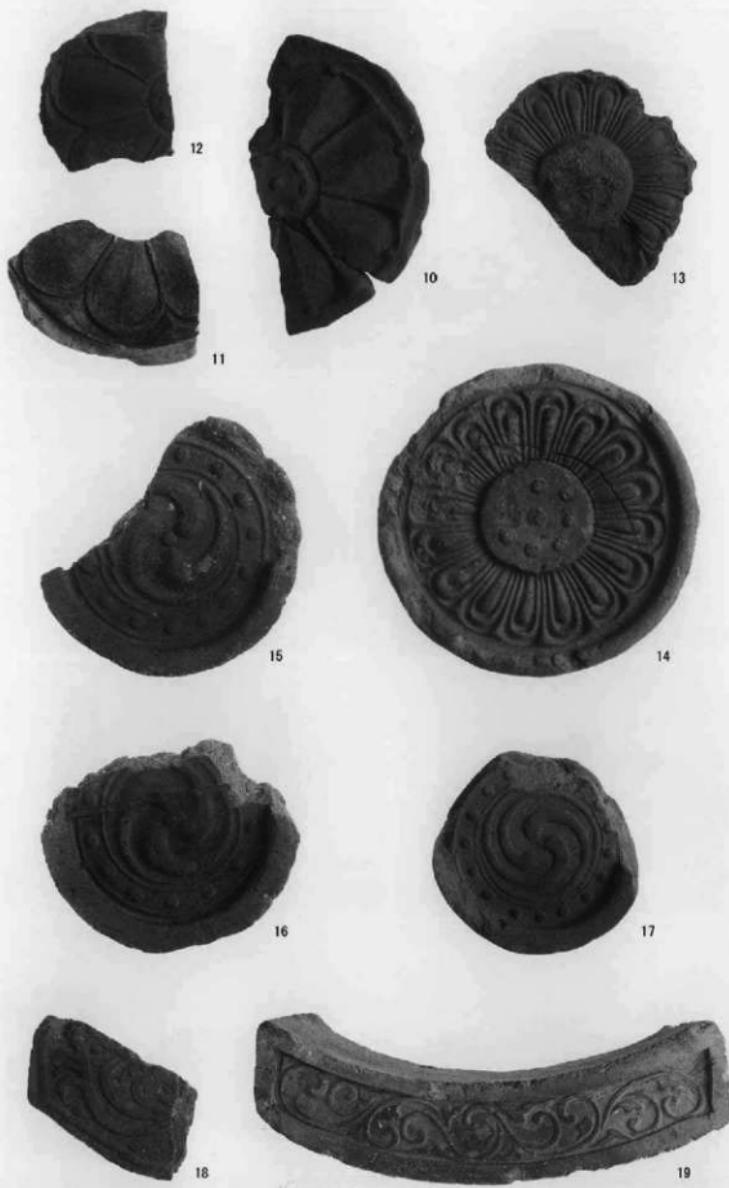
5

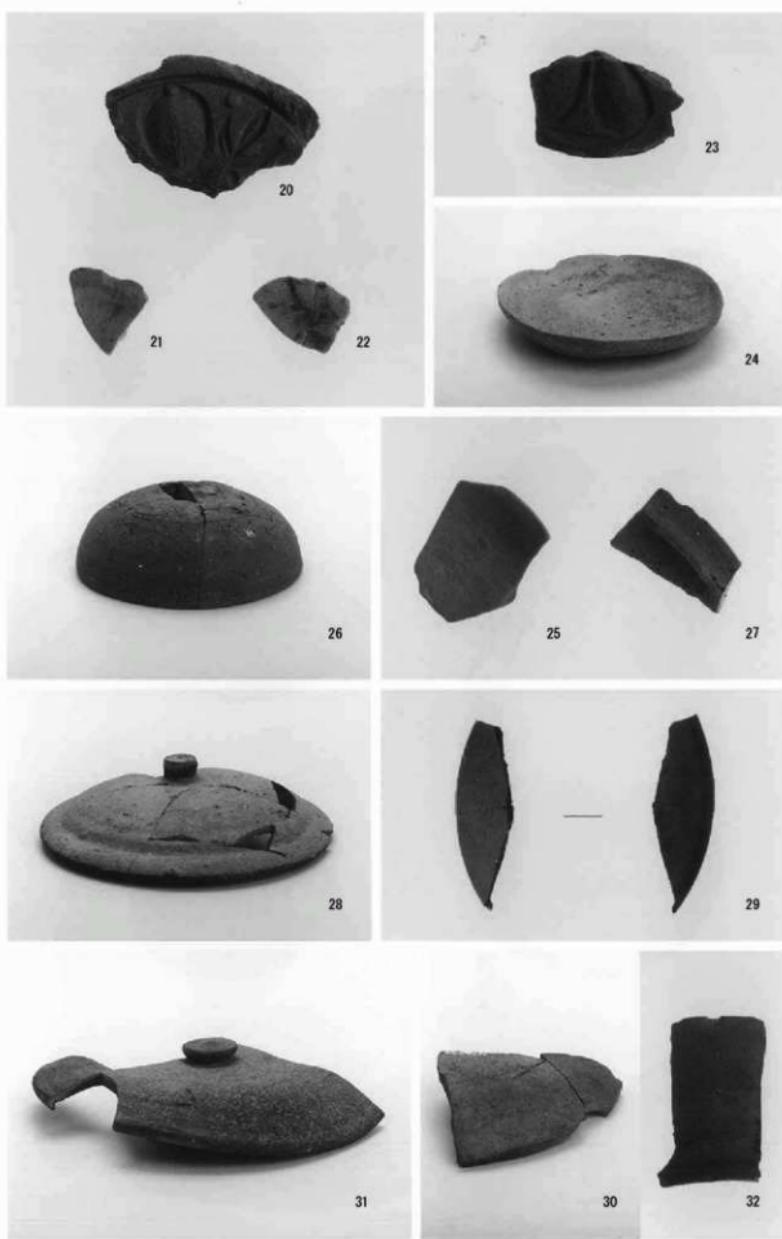


6



写真図版 13
3トレンチ
I～III層出土遺物





報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい9じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	西安寺跡第9次発掘調査報告書							
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	櫻井恵							
編集機関	王寺町							
所在地	〒 636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号							
発行年月日	令和3(西暦2021)年3月26日							
取締遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
奈良県北葛城郡 王寺町舟戸2丁目	29425	1081	34° 35' 36"	135° 42' 45"	2019.11.6～12.20	85 m ²	範囲確認	
取締遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
奈良寺跡 (第9次)	寺院	古代～中世	金堂、瓦石積基礎外 装、足場穴、回廊、平瓦、磚、板土、土 雨落溝、金堂の北方 の整地	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、 師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器	堂塔の東側で回廊跡、金堂の北方では7世紀 後半に造成された整地上に柱穴列、木製柱 龍と考えられる柱根を検出し、西安寺の伽藍 中軸線を確定することができた。それにより、 金堂の規模、中心伽藍の東西幅が復元できる ようになった。			

西安寺跡第9次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書 第16集

2021年3月26日

編集 王寺町
発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地